

令和俳句論考

廣瀬 茂雄

聖河てふ泥の流れや冷し瓜
山を出てあやめの水となりけり

庄田ひろふみ

(第一句集『聖河』より)

本句集のあとがきには、約三十年間で作った句を編年体で編み恩師の有馬朗人先生に捧げるとある。氏の年齢から、作句を大学時代から始めていることがわかる。海外詠も多く、そのあたりも師を意識してのことだろうか。昨年、俳人協会新鋭俳句賞と評論賞の双方を受賞された新進気鋭の若手俳人である。

一句目、句集名にもなった句で、学生時代の作である。前書きにネパール十二句とある、その冒頭の句。インド亜大陸を流れるガンジス川は聖なる河とも呼ばれるが、視覚的には綺麗とは言いがたい。上中流域のネパールでも川は泥の流れのように見えるのであろう。そして、その河畔に冷やされている瓜。聖なる河は人間の生活を支える河でもあるのだ。「聖河」と大上段に振りかぶって、「冷し瓜」で締める。大いなるものと小さきもの、聖と俗、俳味も十分に感じさせてくれる。作者の俳句の原点となった思い入れのある句と見た。

二句目は、一転して日本の情景である。眼前のあやめの群生を潤す澄んだ水を見て、その源流に思いをはせている。一句目と作られた時期は異なるが、作者はこの光景を見た時、ネパールの「聖

河」が脳裏をよぎり、彼の地と日本との違いを思い浮かべたのではないだろうか。大らかな詠みぶり、俳句の醍醐味を十二分に味わえる一句だ。

氏は「天為」同人

目の中のどこかざきりと干潟
浦賀水道西日の船を繰り出して

佐藤 順子

(第一句集『浦賀水道』より)

本句集のあとがきには、大病を機に、「生きながらえたことを思い、句集作りを思い立ち」とある。また苦労すると思っていた選句作業が「思いの外楽しかった」とも述べられていて、作者にとっては人生を振り返る貴重な時間でもあったことが窺える。

一句目は句集の冒頭の作品。平板な光景の続く干潟を詠むのは難しい。ましてや、海近くに住む作者にとって潮の干満で現れる干潟は見慣れた光景のひとつだろう。しかし俳句を始めて間もない作者は「どこかざきりと」という一瞬の感覚を逃さなかった。俳句という表現様式に向き合って初めて言葉にした、干潟に抱いた感慨だったのではないだろうか。

二句目は、句集名にもなった浦賀水道の光景を詠んだ作品だ。浦賀は幕末、ペリーが来航して日本に開国を要求した地である。当時から百七十年以上経った今、当地の沖は船が目まぐるしく行きかう交通の要衝となっている。絶え間ない船の往来も見慣れた光景だろうが、眩しい西日の中を行く船の姿と浦賀水道への思い入れも感じさせてくれる一句だ。

氏は「泉」同人

万緑や閑かに戻つてゐる記憶

細川 洋子

しほさゐは海の心音籐寝椅子

(第二句集「海馬」より)

句集名となつた海馬は脳の記憶を司る重要な部位である。作者は脳腫瘍の摘出手術を受ける迄、病果が海馬を圧迫し続けた影響で一年余の記憶がないという稀有な経験をされた。当句集の初めの方には、その回復過程の句が並ぶ。

一句目の「閑かに戻つてある記憶」という中七下五。今までにかかる措辞のある俳句があつただろうか。記憶が戻つた時の作者の実際の感慨はいかばかりだつただろう。狐につままれたような当惑、そしてそれが現実であることを実感できつつある確かな感覚。溢れる緑の中で自分の存在を再確認できたことを、取り戻した記憶とともに静かに喜んでいる作者の姿がそこにある。

二句目、海沿いの地に保養にでも行かれたのだろうか。籐椅子に身を横たえて潮騒の音を静かに聴いている。それを医師でもある作者は心音と表現した。規則正しく伝わってくる潮騒も海の一部なのだ。陸上の生命も海を起源にしていると云うが、自らの命と海の「いのち」を重ねている一人の人間がそこにいる。

氏は「沖」同人

方舟のやうな気がして北窓開く

窯変をいざなふ東風の吹きにけり

(第一句集「惑星」より)

本句集のあとがきに句歴が人生の半分を越えたとあるが、氏は五十歳を越えたばかりの若手俳人である。

一句目、「北窓開く」は春の季語。冬季に寒気や風を防ぐための「北窓塞ぐ」の対の季語だ。本来、塞ぐ必要がなくなつたから開ける

のだが、開く前の家そのものを作者が、方舟と感じたところがユニークである。季語の本意とは離れてしまうが、昨今の建物のスタイルを考えると、さもありなんと見える句だ。

二句目、「窯変」とは陶磁器の焼成中に火焰の性質やその他の原因で素地や釉に変化が生じたり、形の歪みが変わつたりすること。古来この偶然で数々の名陶が生まれ、字も色の輝きを意味する耀を用い、耀変天目茶碗という最高の一品も今に伝わる。偶然のなせる業を「東風がいざなふ」と言い切つたところが面白い。

氏は元「藍生」会員

遠野路や不作田にたつ石仏

背広着て賢治のやうな案山子たつ

(第三句集「石清水」より)

作者は東北仙台在住の方。印象に残る風土詠を二句挙げた。一句目、石仏を詠んだ俳句は多いが、この句からは石仏の歴史が見えてくる。偶々不作の年の田を見た作者だが、過去から繰り返されてきた凶作により命を全うできなかった者たちに思いを至らせているのだろう。歴史の重みを感じさせてくれる一句だ。

二句目は一転してユーモアのある句。昨今案山子もあまり見かけなくなつたが、なるべく人に似せて作るには変わりがない。宮沢賢治と言えば、冬帽子をかぶり外套を着て荒涼とした土地に俯き加減で立っている写真が有名だが、眼前の案山子の姿があの写真の賢治を彷彿させたのだろうか。賢治を身近に感じている東北の方ならではの一句だ。

氏は「しろはえ」創刊参加

(筆者住所〒444-0842

愛知県岡崎市戸崎元町九一七)